

愛は、なぜ、トリスタンを 破滅させたのか？

クルヴェナールの「恋の代償」の問い

2022/09/13



メロートの剣に倒れたトリスタンを肩に担いで船に乗せ、フランスのトリスタンの先祖の地カレオールまで逃れてきたクルヴェナールでした。しかし、トリスタンは意識不明のまま、眠りについたままです。死んでしまったのでしょうか？ そのとき、牧童が吹く古い懐かしい調べにトリスタンが眼をさします。

「私はどこにいるのだ？」とトリスタン。

「ああ、この声は、我がトリスタンさまだ」とクルヴェナール。

「私を呼んでいるのはだれだ？ クルヴェナール、お前か？」とトリスタン。

恐ろしい飲み物

トリスタン

あのひとは私に毒の入った飲み物を飲ませたのだ。
得られたのは、わが身を傷つけてやまない魔力だった。
死ぬことは許されず、永劫の苦しみに委ねられたのだ!
あの飲み物、あの飲み物! あの恐ろしい飲み物!
いまやどんな救いも、どんな甘美な死も、このあこがれの苦難から私を救うことはできない。
どこにも、安らぎを見出すことはないのだ。
夜は私を昼に向かって放り投げたが、
それは私の苦しみを永遠に、太陽の眼差しにさらしつづけるためなのだ。
おお、この太陽の焼き焦がす光、
その燃えあがる苦しきは、いかに私の脳を燃やすことか!
私を苦悩の手に委ねたあの恐ろしい飲み物。
その毒を、醸(かも)し出したのは私自身なのだ!
それは私に注がれ、歓喜とともに啜りながら、かつて私は飲み干したのだ。
呪われよ、恐るべき飲み物!
呪われよ、お前[媚薬のこと]の作用を煽(あお)った者よ [トリスタン自身のこと]!

この期(ご)に及んでも、トリスタンは、まだ、二人の悲劇の原因を媚薬に託(かこつ)けています。なぜトリスタンは、これほどまでに、媚薬に拘泥(こうでい)するのでしょうか?

「わが殿、トリスタンさま。なんとすさまじい魔力だろう。ああ、恋のまやかし、愛の抗えない力だ」とクルヴェナールもまた、驚きます。

二人を犠牲にしてまで、愛の妙薬は、なにを得たのか?

そこで、クルヴェナールは改めてトリスタンに訊きます。

「この世で最もやさしき(恋の)妄想が、なにゆえあなたさまを破滅させたのですか? 今ここに懺(まご)わっている方は、喜びにみちたお方、誰よりも深く愛し、恋をしたお方。見るがいい、恋はこの方からいかなる代償を得たのかを。恋はいかなるものを得たのかを!」

クルヴェナールは絶叫します。そうです、硬骨漢のクルヴェナールならずとも、トリスタンとイゾルデの愛は「間違った愛」としか思えません。二つの国とその国民を裏切り、恩あるマルケ王を裏切り、忠臣のクルヴェナールを裏切り、ついには二人を裏切って殺す、「不倫の愛」、「禁断の恋」、「邪悪の情欲」でしかありません。トリスタンにその答えを訊きたいのです。いえ、ワーグナーに、訊きたいのです —

「一体、この愛の妙薬は、愛する二人から、なにを得たのか?」

また —

「愛し合う二人は、愛の妙薬から、なにを得たのか?」

その問いに、トリスタンは答えないまま、死んでいきます。代わって、その答えをイゾルデが答えます。それが、イゾルデが最後に歌う歌「愛の死」です。

これは、別項の「一読百解Ⅱ」（2022/08/18イゾルデが歌う「愛の死」は「愛に死はない」と歌っているのです）で述べましたが、この終幕のイゾルデの歌は、「トリスタンは未だ生きていて、イゾルデと一緒にいるのだ」と歌っているのです。なにも、「愛の死」などと言っているのではありません。「トリスタンとイゾルデは、このように、トリスタンは死んでもなお、生きて愛し合っているのだ」というのです。そうです、未だに、「トリスタン と イゾルデ」なのです。

イゾルデ

おだやかに静かにあの方がほほえんで、
目をやさしくあけているのが、あなたには見えませんか？
しだいに明るく輝きをまして、
星の光につつまれながら空高くのぼっていくのが、
あなたには見えませんか？

世間の「掟」（他人の妻である王妃との不倫）や「桙」（この世での生死）を越えて、社会や正義や法律や道徳や亡くなった両親や先祖たちから遠く離れて、トリスタンとイゾルデの愛は、永遠に生きつづけるというものです。二人の愛は、すべてに超越して、美しく、綺麗で、見事で、だれからも羨ましがられる、永遠に賛美される、歴史に残る「最高の愛」だと二人はいうのです。

愛の妙薬は、この世に、最高の愛をもたらした

クルヴェナールの二つの問い — 「一体、この愛の妙薬は、愛する二人から、なにを得たのか？」 「愛し合う二人は、愛の妙薬から、なにを得たのか？」 に対するトリスタンとイゾルデの答は、「最高の愛」です。すべてが、媚薬のおかげなのです。それが、ワーグナーの楽劇《トリスタンとイゾルデ》の結論です。

異議申し立て

「でも、それはおかしい、二人の愛のすべてを媚薬のせいにするのは間違いだ」と強く反対したのが、ワーグナーの曾孫(ひいまご)のカタリーナ・ワーグナーです。カタリーナは、2015年から単独でバイロイト音楽祭の総監督を務めています。2019年にカタリーナが初めて演出した《トリスタンとイゾルデ》は、これまでにない破格の演出でした。まず、第1幕でトリスタンとイゾルデの二人は媚薬を飲まないのです。ワザと器からタラタラと媚薬を床にこぼしてしまうのです。カタリーナは、原作の「媚薬至上主義」に異議申し立てをして、劇の最初から媚薬の靈験(れいげん:神仏の不思議な恩恵)のあらたかさを否定してしまいます。「トリスタンとイゾルデは、ぬけぬけと、恩人のマルケ王を裏切った最悪の悪人だ。世の恋人たちが理想とする愛の姿ではない」というのです。それからあとの物語の展開では、すべての登場人物の言葉や動作で、媚薬を飲んだものとして進められますが、当の本人たちはウソをいつづけているのです。「私たちが恩ある王さまを裏切って不倫をしたのは媚薬のせいだ」と言う抑えられぬ情欲に対する二人の身勝手な口実を、ここで初めてカタリーナは、曝き、封じてしまったのです。前からお互いに愛し合っていたトリスタンとイゾルデは、元々、マルケ王や王国が邪魔だったので、でも、表向き、王を裏切ることは出来ず、アイルランドとコンウォール両国の名誉と歴史を損なうことも出来ず、すべてを媚薬のせいにして、自分たちだけで禁断の恋を楽しんでいたのです。カタリーナだけは、このトリスタンとイゾルデ、それに、それを支援した曾祖父のワーグナーを許せず、邪恋の虚妄を曝いて見せたのです。むろん、従順で、恋多き、観客や批評家た

ちは大騒ぎです。幕が進むにつれてブーイングは次第に勢いを増し、ついに第3幕の始まる前の客席では、この暴露的な演出に我慢ができない観客たちのドスドスンという床を靴で蹴る抗議の音が、恐いぐらいにホール中に響き渡りました。その《トリスタン》上演史上初めてのワグネリアンたちの最大の抗議にもかかわらず、最後の幕であるこの第3幕の終わりで、二人の欺瞞を許せないマルケ王は、死んだトリスタンにすがりつくイゾルデの手を掴んで強引に連れ去るのです。

一つのパロディです

この2019年の曾孫娘カタリーナの《トリスタン》演出は、曾祖父に対する裏切りであって、大変なスキャンダルとしてバイロイト祝祭劇場の上演史に残る異常なものでした。でも、快哉を叫んだ人たちもいます。このカタリーナ演出は、楽劇《トリスタンとイゾルデ》の一つの異議申立であり、隠されていた真実を語る、上出来のパロディでしかありません。一つの楽劇とその原作の神話に対する、もう一つの解釈に過ぎません。トリスタンとイゾルデの愛の不毛を知る醒めた一人の演出家が、いままでの「トリスタンとイゾルデ神話」に対して、「この二人は神聖なる愛に対する裏切り者たちだ」とその正体を曝(あば)いて見せたのです。私たちも、最初から、この二人にはなんだからうさんくさいものを感じていました。結局、不倫であり、裏切り者であり、唾棄(だき)すべき悪人たちなのです。最高の愛の成功者などではありません。知っていて禁断の甘い実を食べた、当然、楽園から剣をもって追い出される、追放者なのです。カタリーナは、フロベール風というならば、もう一人のボヴァリー夫人です。彼女もまた、この《トリスタン》演出でバイロイトの楽園を追われることでしょうか — と思ったのですが、未だに健在です。



ここで、もう一度、クルヴェナールの問いを問うてみましょう。

「一体、この愛の妙薬は、愛する二人から、なにを得たのか？」

「愛し合う二人は、愛の妙薬から、なにを得たのか？」

答は、「なにも……」とカタリーナは答えることでしょう。

[2022/09/13 都築正道]